

中国語と日本語の受動表現について

The passive voice of Chinese and Japanese

王 国 華*

OU kokuka

受動文とは動作主を主語とする能動文に対して、被動作主を主語とする表現である。つまり、主語である動作の主体の「する」という構文に対し、被動作主を主語にして「される」という構文で表す。

どの言語にも見られるように、中国語も日本語も能動文、受動文という表現形式がとられている。日本語の受動文は主に能動文の動詞に接尾辞（助動詞）「れる、られる」をつけてつくられた派生動詞によって構成される。一方、中国語では一般に受動の意を表す受動文は介詞の「被、叫、让、给」などによって構成される「被」字句と呼ばれる。「被」字句とは介詞の「被、叫、让、给」を動詞或いは動作主の前に置くことによって受動を表すものである。

中国語も日本語も動作を受ける被動作主の立場に立って、つまり、被動作主を主格にしてとらえた表現である。また、両言語とも基本的には被害や、迷惑をこうむった不満とか、非難の感情の色彩を表す言い方だったのである。それから両方ともそれぞれ外国語、特に英語の影響を受けて、日本語では、ものごとの状態や、事実の陳述を述べる「非情の受動」、や「自然可能の受動」が現代語で盛んに用いられるようになったが、中国語でも、主に被動作主の状態や、事実を陳述する被動

式が多く作品の中に見られるようになったのである。しかし、中国語の被動式と日本語の受動表現には、まったく同じ意味で使っているものもあり、どちらも受動表現をとれるが、意味が違ってくるものもあり、また、同じ受動文で全然表現できないものも少なくない。それを区別して使うことはわれわれ中国人日本語学習者にとって大変難しい。本稿はその違いについて、例文を対照しながら、分析していきたいと思う。

二

- ① 点心被妹妹吃了
a 妹にお菓子を食べられた。
× b お菓子が妹に食べられた。
- ② 他的衣服被钉子挂了一个口子。
a 彼は釘で服をかぎ裂きにしてしまった。
× b 彼は釘に服をかぎ裂きされてしまった。
△ c 彼は釘で服をかぎ裂きされてしまった。
- ③ 扁担被两端的担子吊得象弓一样弯。
a 天秤棒が両端にさがったかごのために弓のように曲がっている。
× b 天秤棒が両端にさがったかごに曲げられている。
× c 天秤棒が両端にさがったかごで曲げられている。
- ④ 手指被镰刀划破了皮。
a 指の皮をカマで切った。

*長野大学客員教授(大連外国語学院教授)

×b 指の皮はカマに切られた。

×c カマに指の皮を切られた。

上の①～④の中国語はほとんど同じ構文の被動式の文であるが、日本語に訳すと、それぞれ違う。①の「点心」をそのまま日本語の受動文の主語として訳したら誤訳となる。②、③、④も一般の陳述文に訳すのが普通で適訳であるが、そのまま日本語の受動文に訳すと、やや不自然か或いは全然通じない文となる。それは、まず「日本語では有情物（人または人に準ずるものとしてとらえる意思、感情を有するもの）が受身文の主語となるのが伝統で、現在でも根強くいきつづけているということである。」¹⁾ 中国語の被動式と日本語の受動文はどちらも被動作主を主語にしてとらえた表現であるが、中国語の場合は被動式の主語となるものは有情物が無情物かの定まりはない。『現代汉语』²⁾にはこう述べてある。

「在动词性谓语中，主语是受动者，即动作的接受者，这种句子是被动句。

(1) 他弄脏了衣服。

(2) 他把衣服弄脏了。

(3) 衣服被他弄脏了。

例(1)(2)は主動句、是从施动者“他”的角度叙述的。例(2)中用介词“把”引进受动者“衣服”，往往表示对受动者加以外置的意味，例(3)是被动句，是从被动者“衣服”的角度叙述的，突出受动者，用被字引进主动者，一般称做“被字句。”

以上のように、「他」は動作主で、「衣服」は被動作主となっている。つまり「弄脏」という行為を受けたものは「衣服」そのまま中国語では被動式の主語にとらえることができるのである。中国語の受動文も被害とか、自分の不満を言うときに用いられるのであるが、それは一般に事実を被動式の形で、述べることにより、自分の感情を言い表すのである。

ところで、日本語の受動文の主語としてとらえられる被動作主はどのようなものかを見てみよう。『教育用日本語教師ハンドブック④・文法Ⅱ』³⁾には、「述部に受身の形式が現れる表現は、何らかの意味で一方から他方にある行為が及び、その影響をこうむる場合に、その影響をこうむった側の人または物を主格に据えて表すものである。」と書いてある。またこういう文を出している。

A 犬は(わたしの)手をかみました。

→ わたしは犬に手をかまれました。

a 我的手被狗咬了。

b 我被狗咬了手。

B 虫は(わたしの)顔を刺しました。

→ わたしは虫に顔を刺されました。

a 我的脸被虫子叮了。

b 我被虫子叮了脸。

C 三平は(わたしの)足を蹴りました。

→ わたしは三平に足を蹴られました。

a 我的腿被三平踢了。

b 我被三平踢了腿。

D 花子は(わたしの)腕をつねりました。

→ わたしは花子に腕をつねられました。

a 我的胳膊被花子拧了一下。

b 我被花子拧了一下胳膊。

E 先生は(わたしの)肩をたたきました。

→ わたしは先生に肩をたたかれました。

a 我的肩膀被老师拍了一下。

b 我被老师拍了一下肩膀。

上例の中の「わたし」は一般的な陳述文の中では全部ものの所属関係を表す連体修飾語として用いられているが、受動文に直すと、「わたし」は被動作主として受動文の主語になる。ところが、中国語の訳文を見ると、aの方はごく普通の言い方で、bの表現はaよりずっと少ない。要するに中国語の被動式は直接ある具体的な動作を受けたそのものに対して、日本語の場合はある行為や動作のもたらす影響を受けて、感情、感覚的な心の動きを示す主体を被動作主として受動文の主語になるのである。

例①を見ると、中国語の方は「吃」という動作を受けたのは「点心」であって、つまり妹に食べられたのは「点心」であって、「我」ではない。「我」は「点心」の持ち主だという発想から、能動文にしても「我」は「点心」の連体修飾語として用いられているのである。これは中国語の被動式のもっとも一般的な構造となっている。一方、日本語はこれと違って、妹に食べられたのはお菓子であっても、結局、その被害が及んだのはお菓子そのものではなく、お菓子の持ち主「私」であるという発想から、そのものの持ち主を受動文の主語にして、話し手の非難や、不満の気持ちを表

すのである。だから、日本語の受動表現は一般には主語が有情物である。但し、非情物を主語とする受動文が全くないというわけでもない。

三

- ⑤ カメラが机の上に置かれている。
照相机放在桌子上。
- ⑥ プレゼントには手紙が添えられている。
礼物中加着一封信。
- ⑦ スポーツ大会が開かれた。
运动会召开了。
- ⑧ いい結果が期待される。
期待着好结果。
- ⑨ 日本酒は米から、ビールは麦から作られた。
日本酒是由大米作成，啤酒是由麦子作成的。
- ⑩ この工場の製品は、アメリカに輸出された。
这个工厂的产品出口美国。
- ⑪ この本はたくさんの人に読まれている。
这本书为众人所爱读。(这本书拥有很多的读者。)
- ⑫ シューベルトの歌は世界中の人々に愛されている。
舒伯特的歌为世人所爱。(全世界的人都喜欢舒伯特的歌。)

上例の受動文の主語は皆非情物である。⑤、⑥、⑩、⑫は普通は「ている」の形を用いる。このような用法は「非情の受動」と言われて、多くはそのものの状態を表すものである。⑦、⑧は動作主が大多数の人または組織である場合に用いられる。このときは既に受動文の意識が薄く、自然可能に近い性格を持っている用法である。⑨、⑩もこの自然可能の受動と似ていて、ただ客観的に事実を述べただけで、別にその行為によって誰かの影響をこうむることはない。以上のような動作主を取り立てて明示する必要はない場合、またただそのものの状態や様子を述べるだけの場合には、行為を受けた対象を主格にする受動文が用いられる。この受動が現代日本語が盛んに用いられる理由は事務的客観的に事実を述べるのに便利なためではないかと思われる。⑤～⑫の訳文を見てもわかるように日本語の「非情の受動」や「自然可能の受動」を中国語に訳すと、一般の陳述文になる。

日本語では非情物を主語に据えた受動文が用い

られるのは、上のような場合に限られるが、例のような単なる一個人の日常的な行為などを表すには用いられないのが普通である。

それでは、なぜ例の②は主語が有情物であってもbのように受動文に訳せないし、また③、④の「天秤棒」と「指の皮」を①の「お菓子」と同じく目的語として使って、それぞれのbのように訳してもよくない文になってしまうのであろうか。これは動作主というものの性質も考えなければならぬと思う。

中国語でも、日本語でも、動作主というと、つまりその動作の主体である。動作をすることができるのは、まず人間や動物のような有情物だと考えられる。たとえば「爸爸批评了我→我被爸爸批评了。」の動作主はお父さんで、非動作主は私である。これを日本語に直すと「父は私を叱った→私は父に叱られた。」となる。また「狗把妹妹咬了→妹妹被狗咬了。」の動作主は「犬」で、非動作主は「妹」である。日本語に直すと「犬は妹にかみついた→妹は犬にかみつかれた。」となる。ところが、例②、③、④の動作主にあたるものは人間や動物のような能動的なものではなく、品物である。この場合中国語は成り立つのに、日本語はなぜいけないのであろうか。

例②は「釘」が能動的に彼の衣服をかぎ裂きしたのではなく、彼の衣服をかぎ裂きした道具が釘だということをいっている。③はその天秤棒が曲がっている原因は、両端にさがったかごのせいであり、④は指を切った道具はカマであるということを行っているのである。が、意識があってもなくても、そのものの動作であってもそうでなくても、その結果としては被動作主の衣服、天秤棒、指の皮に働きかけたということになる。したがって、中国語の場合は、話し手がその被動作主の立場に立って、それに働きかけたそのものを動作主としてとらえるのである。

ところが、それに対して日本語の場合は自分自身から働きかけない品物を動作主だということはできない。もしそのまま日本語の受動文に訳したら、②は、その釘が意識があるように、わざと彼の衣服をかぎ裂きし、③は、天秤棒の両端にさがったかごが意識的にその天秤棒を曲げようとし、④は同じように、カマがどこからか飛んできて、

指の皮を切ったというような気がする。いかにも不自然な文になってしまう。

こうしてみると、中国語の被動式の動作主が品物のような非情物である場合は、それを日本語に訳すとき、まずその動作にあたるものの文中での本当の働きを考えてからでないと、誤訳になりかねない。

それを区別する一つの方法としては、中国語の受動文の介詞「被、叫、让、给」の後に、つまり動作主の前に「某某人用」を入れてみることでと思う。それを入れてみて、文の根本的な意味も変わらないし、できた文が非文法的ではなければその動作主は日本語の道具を表す格助詞「で」を用いたほうが良いと思う。たとえば、仮に④の主語は「わたし」とすると、その文の「被」の後に「他用」を入れたら、「我被他用镰刀划破了手。」という文になり、日本語に直すと「私は彼にカマで指を切られた。」となる。これは少しもおかしくない文である。しかし、例②、③は④と違って、それぞれのbのように陳述文の形を取るほうが自然である。というのは、②、③は誰かが「釘」や「天秤棒」を使ってそうしたのではなく、つまり「用」の主語がないので、釘やかごを道具格で表したら、ややすわりの悪い文となるからである。ところが、日本語の受動文の動作主にあたるものは、非情物がすべていけないということもできない。

⑬ 遠く of 山々は霧に覆われて、ほうっとしか見えない。

⑭ 川に落ちた靴は、大波に押し流されてしまった。

⑮ 雨に降られて、びしょ濡れになった。

⑬～⑮のように、ある自然現象によって、ある状態になったということを表す場合に、被動作主も、動作主も非情物であっても、受動文が成り立つ。考えてみると、これらの自然現象は自身からの変化、移動によってほかのものに一定の影響をもたらすことができる点は、意識的にある影響を他のものに及ぼすことと客観的な結果としては同じことだから、こういう使い方ができるのではないかと思われる。これと同じ性質を持っているものは、また次のようなものがある。

⑯ もう少しで頭を車のドアにはさまれるとこ

ろだった。

⑰ その作品が世間に認められている。

⑱ この説は学界に受け入れられる。

⑲ 先生の威厳に抑えられた。

⑳ そのとき家族は大変貧乏な生活に苦しめられていた。

のように、動作主が「世間」「学界」「組織」などの準人格的なものもあり、⑲、⑳の「威厳」「生活」などのような抽象的な概念もある。

以上の分析を見ると、①、②、③、④の文はなぜそのまま日本語の受動文に訳せないのかはわかるのだろうと思う。

四

中国語言語学者大河内康憲先生が「日・中語の被動表現」⁴⁾という論文に次のように述べられている。「受身というものが、誰かが影響を受けることを言うためのものだと考えることは、受身の理解にとっては核心的な部分だ。」受動文は陳述文より感情の色彩が強い表現である。但し、中国語の被動式は一般に直接動作、作為を受けた人または物を主格にして、事実を述べることによって、その影響を受けたときの感情そのものを表すのに対して、日本語の受動表現はその行為がもたらした影響を受けて心の動きを示す主体を被動作主として主語にし、文の構造からはっきりとその話し手の感情を表すのである。したがって、現代中国語の被動式は日本語の受動表現ほど感情の色彩が強くないのである。それに、言語自身の変化と発展によって、被動式の使用範囲もだんだん広くなり、被動式で、被動作主を強調するだけの単なる事実を述べる中間的な表現も使われるようになった。

㉑ 房间被她打扫的干干净净。

a 部屋は彼女がきれいに掃除してくれた。

× b 部屋は彼女にきれいに掃除された。

㉒ 电脑已经被小王修好了。

a パソコンはもう王さんに修理してもらった。

× b パソコンはもう王さんに修理された。

㉑、㉒はどちらも話し手に恩恵をもたらしたことなので、日本語の「～てくれる」「～てもらう」などの形に訳すべきであろう。

上のような場合のほかにも、ただ文字だけか

ら見れば感情の入っている言い方なのか、一般に事実を陳述するだけなのかは分からないときが多いのである。

㉓ 三本杂志叫小王拿走了两本。

a 三冊の雑誌のうち二冊を王さんに持っていかれた。

㉔ 三本杂志叫我拿来了两本。

a 私は三冊の雑誌のうちの二冊を持ってきた。

× b 三冊の雑誌のうち二冊を私に持ってこられた。

のように、㉓の日本語の訳文を見ると、どうも非難や不満の気持ちを感じてしまうのだが、中国語のほうは、話し手の調子によって不満や非難の気持ちを表すときもあるし、一般の事実を述べていることを表す時もある。たとえば「三本杂志叫小王拿走了两本，叫小张拿走了一本。」という場合は、日本語に訳すと「三冊の雑誌のうち、王さんが二冊を持って行き、張さんが一冊持って行った。」となる。ただ陳述だけで、別に不満などの気持ちはないと思う。更に㉔を見ると、完全に客観的な事実を言うだけで、別に迷惑や不満の気持ちは全然ない。あるいは、その話し手の調子によって、得意そうに言ったかもしれない、つまり「全部で三冊だったが、私はその中の二冊も持ってきたのよ。」という場合もありうる。こういう時は、日本語の受動文に訳せないのである。

日本語の受動表現も、ただ客観的な事実を陳述するだけの場合の用法もあるが、その場合でも以上述べてきたように単なる一個人の日常的な行為や具体的な個別の事柄などを表すのには用いないのが普通である。この点では中国語の被動式と異なる。次のような例文も上記の内容に該当するものだと思う。

㉕ 小王的《西游记》被他给借走了。

a 王さんの『西遊記』は彼が借りてしまった。

b 王さんの『西遊記』は彼に借りて行かれた。

㉖ 小王的《西游记》被你借走了。

a 王さんの『西遊記』はあなたが借りて行ったの。

× b 王さんの『西遊記』はあなたに借りて行かれたの。

㉗ 小王的《西游记》被我借走了。

a 王さんの『西遊記』は私が借りて行ったの

だ。

× b 王さんの『西遊記』は私に借りて行かれたのだ。

㉕～㉗は普通の場合には客観的な事実を述べる文だから、受動文に訳すとすわりの悪い文となる。ところが、㉕は極端なときには使うかもしれないが、例えば、「私」或いは誰かが『西遊記』を読もうとしている。自分の知っている人の中に王さんしかその本を持っていない。そして、王さんのところへ借りに行ったら、王さんの『西遊記』を先に「彼」が借りて行った。そのために自分が読むことができなくなった場合である。こういった表現は、実際のところ日本語の中では多く使われていない。この場合は a のように「～してしまった」の形に訳せば原文の言っている意味・内容を十分表現できると思う。なお、㉕～㉗の例文を見てもわかるように、中国語の被動式は動作主として、第一、第二、第三人称がみな使えるのであるが、日本語のほうは第一、第二人称の場合はほとんど使えないのである。これはもう一つ待遇表現の問題だと思う。

五

以上の対照を通して、中国語と日本語の受動表現における制限とそれぞれの特色を分析してみた。中国語の被動式はその文脈によって、被害や迷惑の意を表すものもあれば、中性的な被動式も、例㉑、㉒のように積極的な性質を持った被動式もある。しかも、それらは個別的な日常生活の中の具体的なことを言う場合は、迷惑や被害のときに使うのがほとんどである。これに対して、日本語の受動表現は、被害の感情の色彩がかなり強く、さらに、待遇表現にもかかわるので、中国語の被動式を日本語に訳す場合、その文の文脈の中での意味を見て、ある動作、行為が受け手である自分から見て、非常に迷惑だというときには「受動文」を使うが、そうでない場合は、陳述や「～してしまう」を使い、恩恵を受けたという意味がある文なら、「～してくれる」とか「～てもらおう」を用いると考えてもよいと思う。中国語と日本語の受動文の対照研究は今まで多くの指摘があるように、主観的に表現するか、客観的に表現するかという要因、そして、それぞれの受動文自身の語彙的、文

法的要因も複雑に絡んでいると筆者は考える。これらの要因については、別の機会に考えたいと思っている。

注

- 1) 阪田雪子 倉持保男『教育用日本語教師ハンドブック④・文法・助動詞を中心にして』凡人社 1993年 21頁
- 2) 张志公『現代汉语』人民教育出版社 1985年 115頁
- 3) 阪田雪子 倉持保男『教育用日本語教師ハンドブック④・文法・助動詞を中心にして』凡人社 1993年 19頁
- 4) 大河内康憲「日・中語の被動表現」『日本語学』明治書院 1983年 31頁

参考文献

- ① 阪田雪子 倉持保男『教育用日本語教師ハンドブック④・文法・助動詞を中心にして』凡人社 1993年 19～22頁
- ② 益岡隆志『基礎日本語文法』くろしお出版 1989年 90～92頁
- ③ 张志公『現代汉语』人民教育出版社 1985年 114～116頁
- ④ 苏琦「汉语被动句与日语被动句的比较」『中国日语教学研究文集3』上海译文出版社 1991年 1～9頁
- ⑤ 王国華「“受身文”与汉语被动句的对照研究」蔡全勝主編『日本文化论丛』大连理工大学出版社 2004年 73～79頁
- ⑥ 周啓紅「日本語受動文の三類型と中国語の受動文」佐治圭三教授古稀記念論文集『日本と中国ことばの梯子』くろしお出版社 2000年 347～358頁